

菅茶山「浩氣説」について

清水洋子
(人間文化学科)

江戸時代、儒者でありながら漢詩人としての名が広く知られていた菅茶山(一七四八―一八二七)には、詩以外の作品を収録する『黄葉夕陽村舎文』がある。本書が収録する複数の経説は、儒者としての茶山の思索を記しており、茶山の教學活動や福祉活動を支えた思想的基盤を知る上で有益な資料となっている。本稿は、茶山の経説の中から『孟子』における「浩然之氣」について論じた「浩氣説」を取り上げ、その概要ならびに訳注を示すものである。

【キーワード】 菅茶山 儒家 浩然之氣

一、はじめに

江戸時代、福山神辺の漢詩人として知られた菅茶山(一七四八―一八二七)の『黄葉夕陽村舎詩』は、その詩作を知るためには不可欠な資料であり、現在最も容易に閲覧できるのは、葦陽文化研究会による編集で、児島書店より影印刊行された『黄葉夕陽村舎詩(全)』(一九八一年)である。また同書には、茶山による散文や墓誌銘等をまとめた『黄葉夕陽村舎文』も収録されており、漢詩人・菅茶山とは異なる姿を窺い知ることができる。中でも本稿が注目したいのは、茶山が儒者としての経書解釈を記した経説である。

筆者が確認する限り、茶山による経書解釈の文章は、研究書として刊行するほどの分量を持たず、文集や随筆の一部として収録されるほどの規模に収まっている(一)。茶山の経書研究態度は、考証学的態度によつて経書の訓詁等を追究するといふよりは、教學において儒学の精神をいかに伝えるかを念頭に置いた経書解釈が主であったと推測される。

『黄葉夕陽村舎文』において茶山の経説として確認できるのは、「誠意説」「性説」「黙而識之説」「克己説」「浩氣説」の五篇で、どれも四書と関連する内容となっている(二)。これまでの茶山研究では詩作を対象とするものが多く、その経説研究については十分な蓄積がない。上記の経説五篇についても同様である。

また、詩人・教育家として知られた茶山には、それらの活動に関する言説が多いことはもちろんであるが、実は福祉活動とも言える救恤行動に関連した言説も見えている(三)。こうした活動への意欲を支える理念は、やはり茶山の思想的基盤となった儒学を根幹とするものであろう。儒者・菅茶山としての思索をより明確なものにするためにも、まず求められるのは、茶山の経説の全貌を明らかにしてゆくことではないだろうか。

そこで本稿では、その足がかりとして「浩氣説」を取り上げ、本論の概要ならびに内容把握のための訳注を示したい。

二、『孟子』「浩然之氣」について

「浩気説」の「浩気」とは「浩然の気」のことを言う。孟子と弟子の公孫丑こうそんちゆうの問答中に見え（『孟子』公孫丑上）、儒家思想においても重要な概念とされている。以下、孟子が「浩然の気」について語るまでの流れを確認するため、問答の流れを四つに分けて示す。

① 仮に齊せいの大臣となった場合、その重責で心が動揺するのではないか、という公孫丑の問いかけに対し、孟子は四十歳以降、動揺することはなくなつた（不動心）と答え、更にこの不動心の修業について、自身は論敵である告子こくしもよりも優位に立っているとと言う。また、勇者として名高い北宮黜ほくきゆうちゆうの勇と孟施舎もうししやの勇についても言及する。

② 更に孟子は、この勇者たちを孔子の高弟たちになぞらえ（孟施舎は曾子そうしに似、北宮黜は子夏しかに似る）、自らの気力を守るという点で、孟施舎は北宮黜に勝つているとする。その上で、曾子の守り（自ら反省して正しいと思えない時は、誰に対しても後ろめたいが、自ら反省して正しいとなれば、誰に対しても胸を張れる）について述べ、これが真の勇氣であるとする。

③ 孟子は、自身と告子、それぞれの不動心について語り、告子の不動心を部分的に「可」「不可」と評価する。そして、評価の根拠について、体内に充ちる気（元氣）を統率するのが志（心）であり、志の至るところに気が付き従うこと、それゆえ志の堅持が重要で、気を乱してはならないことなどを述べる。

④ 孟子は、自身が告子より長じている点として「言を知る」ことと（四）、「浩然の気を養う」ことを挙げ、「浩然の気」については次のように説明する。

言い難がたきなり。其の気たるや至大しだい至剛しこう、以て直ちよく、養いて害すること無ければ、則ち天地の間に塞ふさがる。其の気たるや義と道ぎどうに配はいし、是れ無ければ餒うう。是れ義の集まりて生ずる所の者にして、義の襲おそいて之を取るに非ざるなり。行いの心に慊あやからざること有れば則ち餒うう。

言葉では説明が難しいと断つた上で、この気が至極大、剛、直であること、養えば天地に充滿すること、義と道に配合するもので、そうでなければしぼんでしまうこと、義が自身の内側に蓄積した結果生じるものであり、外から義が入り込んで生じるものではないこと、自身の行いに後ろめたいことがあるとしぼんでしまうことなどを述べる。そうした上で、義を外にあるものと考え、告子を対比的に評価し、浩然の気を養う要訣として、努力することはもちろんだが、結果を予期したり、早く効果をあげようとするのも問題であるとして、「助長」の話を出して締めくくる。

三、「浩気説」について

茶山の「浩気説」は、前節にて確認した「浩然の気(浩気)」について、身近な事例を挙げながら論じたものである。なお、この「浩気説」には、内容が一部重複する複数の草稿があることから、茶山が推敲を重ねて執筆を進めていたことがわかる。以下、筆者が確認した資料をもとに、現時点で考えられる推敲過程を示す。

- I … 「浩気説」#1024-169-2(『黄葉夕陽村舎文庫 目録Ⅲ 日記・草稿篇』資料番号)
- II … 「浩気説」#1023-241-16
- III … 「浩気説」#G006-2-032
- ① 『黄葉夕陽村舎文』中の「浩気説」#008-012
- IV … 「菅茶山経説草稿」(末尾に問答の一段を追加)#G006-1-077
- V … 「茶山経説につき菅景知^(五)評論」#G006-1-033
- ② 『黄葉夕陽村舎文』中の「浩気説」(更に問答の一段を追加。欄外処理も行う)#008-014
- ③ 「黄葉夕陽村舎文草稿」#G008-052

一篇の資料として独立しているものはI～V、段階的に推敲された『黄葉夕陽村舎文』に収録されているものは丸数字で示した。内容から見るに、「浩気説」の成立に至るまでには、次の二段階を経ていると考えられる。

〈第一段階〉I～①：茶山が「浩気」の対極に「癩癩家」を置き、双方の特性を論じる。「浩気説」として段階的に推敲を経たもの(I～III)のうち、IIIが清書されて①に収録されたと考えられる。

〈第二段階〉IV～③：「浩然之気」をめぐる質疑応答を段階的に追加^(六)。②において欄外に記された問答の一部も、③では本文として記されている。

現在、筆者はI～V、①～③の校勘を通じて推敲の詳細を調査中である。これについては別稿にて整理することとし、まずは、「浩気説」の成立過程を検討する前段階として、完成稿となる「浩気説」全体を把握する必要があると考える。そこで次節では、現在閲覧上で最も簡便な『黄葉夕陽村舎詩(全)』内の『黄葉夕陽村舎文』が収める「浩気説」を底本とし、訳注を示す。

四、「浩気説」訳注

【凡例】

- ・字体は、俗字と異体字を含め、全て通行体に改めた。
- ・「黄葉夕陽村舎草稿」と同じ箇所を区切り、その際は適宜句読点を使い分けた。

・各節の見出しは訳者が便宜上付したものである。
・現代語訳では、適宜「」によって言葉を補った。

(1) 「癩癩家」に ついて

【原文】

孟子浩然之氣者今之所謂癩癩家之反対也。夫癩癩之為病、每有一事不如其意、輒艱然不能自持。顰蹙躁擾、欲漏其漑。有蒙被而臥者、有跣足而走者、有投碎什器者、有毆擊婢僕者、笑者啼者、歌者泣者、曠者吃者、舞者躍者、号者罵者、默者訴者、手作勢者、臂不帖牀者、異態百出、不可名狀。甚者投身于水、刺刀于腹、斃而後已。即有省其為病、業已心為其氣所驅使、駸駸乎不能自止。發為狂悖、鬱為廢癩、亦末如之何也己。

【書き下し文】

『孟子』浩然の氣は今の所謂癩癩家の反対なり。夫れ癩癩の病たるは、一事の其の意に如かざることある毎に、輒ち艱然として自ら持すること能わず。顰蹙躁擾にして、其の漑を漏らさんと欲す。蒙被して臥す者あり、足を跣して走る者あり、什器を投げて碎く者あり、婢僕を毆撃する者あり。笑う者啼く者、歌う者泣く者、曠る者吃る者、舞う者躍る者、号する者罵る者、默する者訴うる者、手づから勢いを作す者、臂の牀に帖まらざる者、異態百出して、名状すべからず。甚しき者は身を水に投げ、刀を腹に刺し、斃れて後に已む。即ち其の病たるを省みること有るも、業已に心は其の氣の驅使する所と為り、駸駸乎として自ら止むること能わず。發して狂悖と為り、鬱がりて廢癩と為るも、亦た之を如何ともせざるなり。

○癩癩：激怒しやすい神経質。癩症。○顰蹙躁擾：顔をしかめて、いらだつさま。○漑：煩悶。もだえ。○蒙被：物をひつかぶる。○跣：はだしになる。○斃而後已：死ぬまで続けること。○駸駸乎：馬が疾走するさま。転じて事態の急速なさま。○狂悖：異常な心理状態で道理に背く。○廢癩：不治の病。「癩」は、病氣や癖などがなかなか治らないさま。

【現代語訳】

『孟子』の「浩然の氣」は、今で言うところの「癩癩家」の対極に位置するものである(セ)。そもそも癩癩の病というのは、ひとつ思い通りに行かないことがあるたびに、すぐさまむっとなつて、平静を保つことができない。顔をしかめていらだち、その煩悶を発散させようとし、物をひつかぶつて臥してしまふ者もあれば、裸足になって駆ける者もいるし、家具や道具を投げて破碎する者もあれば、下男や下女を殴りつける者もいる。笑う者や声を張り上げてなく者、歌う者や涙を流してなく者、目を怒らせる者やどもる者、舞う者や躍る者、声高に叫ぶ者や罵る者、黙りこくる者や「誰かに何かを」訴える者、手をぶんぶん振り回す者、寢床や床に落ち着いていられない者など、異常な姿態が現れ出て、いちいち名づけることなどできない。ひどい者になると、命を落とす状態になるまで、水中に身を投げたり、刃物を腹に刺す。「そうした症状が出て」すぐさまこれは病ではないかと振り返ってみるが、心はずでに当人の氣に追い立てられてしまつていて、「症状も」どんどん進んでしまい自制できない。心持がおかしくなつてしまつたり、鬱屈として不治の病となつてしまつても、どうすることもできない。

(2) 不義の集積がもたらす怪気

【原文】

凡如此者、雖係稟質之偏、而亦由蒙養之弗端、馴致至此。其初父母之過愛養之、室家之富饒培之、加以外無切悃之友、內多陪奉之人、肆意使氣、無所抵牾、日畜月積、以凝一團怪氣、至乎不可救藥。蓋集不義而生之而已。

【書き下し文】

凡そ此くの如き者は、稟質の偏りに係ると雖も、亦た蒙養の端さざるに由りて、馴致し此に至る。其れ初めは父母の過ぎて之を愛養し、室家の富饒は之を培い、加うるに外は切悃の友なく、内は陪奉の人多きを以てすれば、意を肆にし氣を使うも、抵牾く所無し。日に畜え月に積めば、以て一團の怪氣を凝り、救うに藥もてすべからざるに至る。蓋し不義を集めて之を生ずるのみなればなり。

【注釈】

○稟質：生まれつきの氣質。○蒙養：子どもを教育する。○端：まつすぐなさま、かたよらないさま。○馴致：徐々にその状態に慣れさせる。○富饒：「饒」は有り余る。○切悃之友：互いに善を勸めて励まし合える友人。「切」は、ねんごろなさま。「悃」は、互いに努め励まし合うさま。「子路問曰、何如斯可謂之士矣。子曰、切悃悃、怡怡如也、可謂士矣。朋友切切悃悃、兄弟怡怡如也。」(『論語』子路)○抵牾：もどく。非難する。○不義：人の道から見て正しくない行い。

【現代語訳】

およそこのような者は、生まれつきの氣質の偏りが関係するとはいっても、教育がしつかりとされていなかったことから、「現状に」慣れてしまった結果この状態に至る。両親がその人を過度に大切に養育するところからはじまり、裕福な家庭環境の中で養われ、加えて外には互いに励まし合える友がおらず、家の中には使用人が多いことで、勝手我儘で勇み立っても非難されない。「そうした状況が」日月を経て蓄積されると、ひとかたまりの怪氣として凝り固まり、藥でも救えない状態に至る。それはおそらく人として良からぬ行いが集積することで生じてしまったためなのだ。

(3) 浩然の氣と痼癘の病に通底すること

【原文】

夫浩然之氣、行不慊於心則餒矣。不慊者不如其意者。不如其意者、未得其義也。其得其義者、積之畜之、慣而為常、習而成性、以生斯氣。斯氣之生、而配合其道義、勇決行事。凡所作為、無適非斯氣所助与彼病之凝、而驅使其心性、煽熾其狂悖、凡所応酬無適非彼病所致、雖如氷炭黑白、然而其由吾積而生之、生而助吾、則同。余故曰、孟子浩然之氣者、今之所謂痼癘家之反對也。

【書き下し文】

夫れ浩然の氣、行い心に慊こころよからずんば、則すなわち餒うう。慊こころよからざる者は其の意に如しかざる者なり。其の意に如しかざる者は、未いまだ其の義を得ざる者なり。其れ其の義を得る者は、之を積つみ之を畜たくわえ、慣つねれて常つねと為し、習せいて性を成し、以て斯の氣を生しず。「斯の氣の生まれて其の道義に配はい合ごうし、勇決ゆうけつして事を行えば、凡そ作為する所、適てきとして斯の氣の助くる所に非あらざる無し」と「彼の病の凝こりて其の心性を驅くし、其の狂悖きやうはいを煽せん熾しすれば、凡そ応酬おうしゆうする所、適てきとして彼の病の致いたす所に非あらざるなし」とは、氷炭黒白の如ごとく、雖いへども、然るに其の吾われに由りて積つみて之を生じ、生じて吾われを助くるは、則すなわち同じ。余故われゆえに曰く、『孟子』浩然の氣は、今の所謂癩いん癩かん家かの反対なりと。

【注釈】

○慊：こころよいさま。後ろめたいことがないさま。○餒：飢える。ここでは、しぼむ。○不如其意：不如意。思うようにならないこと。○適：適然。ちょうど、たまたま、ほどよく。○助：助勢。勢いをそえる。○狂悖：訳が分からず取り乱すさま。○煽熾：あおる。○氷炭黒白：氷と炭火、黒と白のように、性質が全く相反するもの。

【現代語訳】

そもそも浩然の氣とは、自身の行いが心においてこころよいものでなければしぼんでしまう。こころよくない者は、自身の思うようにならない者のことである。自身の思うようにならない者は、まだよろしき道を得ていないということである。よろしき道を得た者というのは、こころよいものを積み上げて蓄積し、「次第にそのことに」慣れてきて、それがいつもある姿となり、「次第にそのことが」繰り返されてそういった性質となり、そうしてこの浩然の氣が生じるのだ。「その人から」この氣が生じて道義に合するものとなり、勇敢な心持ちで心を決めて行動すれば、どの行いもちょうど浩然の氣が助勢するようになること」と、「[例の怪気による]病が凝り固まり、当人の心性を駆けずり回らせ、道理に背くような言動を煽るようであれば、周囲とのやりとりはどれも、その病がちょうどそうさせてしまっていること」とは、氷と炭火、黒と白のように真反対のことであるが、自身[の内面]に蓄積されて生じたものが、自身の状態をより勢いづかせる点では同じなのだ。だから、『孟子』に言う「浩然の氣」は、今で言うところの「癩癩家」の反対であると言うのだ。

(4) 浩然之氣章をめぐる問答

【原文】

此有人質浩氣之章、再四弁拆、似有不了然者。乃書此示之。或曰、浩氣集義所生。非窮理知言則不能矣。今対以怪病、得非失於淺乎。余曰、否。聖之反對為狂、為凡。狼跋詠周公以為反興。請再思焉。或又曰、反之為言、吾既聞命矣。然則世之無此病者、皆必有一小浩氣否。余曰、嗜好之偏、亦各生其氣、如溺色、涵酒、徇權、貪財。其意念氣象、如有物馮之然、是亦集而生之者、所謂養配慊餒莫不畢具、而常情率同。是以人不覺其為異。要之与癩癩同流異派爾。若夫癩癩其尤甚而易觀者。故今以此証之、其余類推而可。其人唯唯而退。

【書き下し文】
比る人ありて浩気の章を質すこと、再四弁拆し、了然とせざるあるに似たる者なり。乃ち此れを書きて之に示す。或るひと曰く、「浩気は義を集めて生ずる所なり。理を窮め言を知るに非ずんば則ち能わず。今対するに怪病を以てするは、浅きに失するに非ざるを得んか」と。余曰く、「否。聖の反対は狂たり、凡たり。狼跋は周公を詠みて以て反興を為す。請う再び思わんことを」と。或るひと又曰く、「反の言為る、吾既に命を聞けり。然らば則ち世の此の病無き者は、皆必ず一つの小浩気有るか否か」と。余曰く、「嗜好の偏りも、亦た各の其の氣を生ずれば、色に溺れ、酒に湎れ、權を徇め、財を貪るが如し。其の意念氣象、物有れば之に馮くが如く然り。是も亦た集まりて之を生ぜし者にて、所謂「養」「配」「慊」「餒」、畢く具わらざる莫くして常情率ね同じ。是を以て人其の異を為すことを覺えず。之を要するに癩癩家と同流異派なるのみ。夫の癩癩の若きは其れ尤も甚しくして覩易き者なり。故に今此れを以て之を証すれば、其の余りは類推して可なり」と。其の人唯唯として退く。

【注釈】

○再四：再三再四。幾度も。○弁拆：道理に合うかどうか考える。○窮理知言：「窮理」は、朱子学の「居敬窮理」に拠る。「知言」は、言論の真意を見抜くこと（本稿第二節参照）。ここでは、「浩然の氣」について孟子が語る文脈を踏まえてのものであろう（八）。○聖之反対為狂、為凡：「聖」は、聖明。事理に通達するさま。「狂」は、狂易。常態を失ったさま。○狼跋詠周公以為反興：『詩経』豳風「狼跋」詩を踏まえる。「狼跋」は、老狼の姿や進退窮まることを示す。「周公（周公旦）」は、殷王朝を倒した武王を助け、武王の死後は幼い成王を助けて摂政となり、周王朝の礎を築いた人物。「狼跋」詩は、管叔と蔡叔による反乱と異民族の平定（東征）後における周公の盛徳を称える（九）。「反興」は、対義を有する二つの事象や叙述を繋ぐ連想の意。「狼跋」詩では、老狼（もしくはそれにぞらえた、進退窮まるさま）と、盛大な徳を持ち、正装麗しい周公との対比を詠む（十）。○命：おしえ。○湎：酒色などに夢中になる。○徇：底本では「狗」（「徇」の俗字）に作る。もとめる。○意念氣象：「意念」は、心持ち、念慮。「氣象」は、氣質。○馮：せまる。依る。○養配慊餒：『孟子』浩然の氣に関する論述内に見える用語。本論でも茶山が触れている。その氣が養われること（養）、道義に配合すること（配）、心においてこころよいと思うこと（慊）、道義にそぐわなければその氣がしばむこと（餒）。○常情：人が通常のものとして持つ心持ち。

【現代語訳】

近頃ある人が浩気の章（の解釈）について何度も問いただしており、腑に落ちないようであった。そこでこのことをここに書き記して示しておく。その人が言うに、「浩然の氣は義を集めて生ずるものです。理を窮めて言を知るのでなければ、「浩然の氣は」生じることができません。「それなのに」今その浩然の氣に対するものとして癩癩といった精神異常というあやしげな病をもつてするのは、あまりに浅薄な考えではありませんか」と。私は言った。「いや。聖明の反対は狂易であり、凡俗である。『詩経』の「狼跋」詩は「老狼もしくは、誹謗される苦境に周公が置かれていたことに対し（十）、そうした苦難の中でも盛徳を保ち得た」周公を詠むことで反興をなしている。もう一度考えてみなさい。「ある人がまた言うに、「反」という語については既にご教示いただきました。そうであれば、世間にこの病がない者は、誰にでも必ず一つの小浩気なるものがあるのでしょうか。」私は言っ

た。「嗜好の偏りという点も、各人が「嗜好へと赴く」気を生むようであれば、「その果てにあるのは」酒色に溺れ、権力を求め、財を食るといった姿だ。心持ちや気質というのは、「その人の嗜好に合う」物があれば、そこに依りつくようなものである。「こうした小さな心の動きが」集積して生じた気というものは、どれも「浩然の気において言われるような」いわゆる「養」「配」「慊」「餒」の状態を備えており、当人のそうした心持ちが「当人にとっては」当たり前前の状態」になっていく。こういうわけで、人は自分「の心持ち」が異常な状態であることを自覚しなくなる。これはつまり痲癩と物は違えど同じ傾向を持つものである。この痲癩などは、極めて程度が激しく目に見えてわかりやすいものだ。それだから、今ここで述べてきたことによって検証すれば、それ以外のものも同じように類推してよろしい。」その人は異議を唱えることなく退いた。

五、おわりに

以上、茶山の経説の中から「浩気説」を取り上げ、概要と訳注を示した。経書において重要な概念である「浩然の気」について、茶山は伝統的な解釈を前提に論を進めるといっても、非常に身近な日常の場面や人々の様子を取り上げつつ論じていたことが分かる^(十二)。

また、「浩気説」の興味深い点として、「浩然の気」をめぐる問答が記録されていることが挙げられる。これは「浩気説」推敲の過程において追加された一段であるが、茶山の解釈を理解する上で重要な役割を持つものであり、茶山の日常における教学の一場面を知る上でも貴重な内容だと思われる。

既に述べた通り、茶山の「浩気説」は段階的な推敲を経て完成されたものであった。現存する複数の資料は保存状態も良く、推敲過程において順次付加された内容の解説に大きな支障はないため、解説を進めていけば、「浩気説」における茶山の思索の跡を辿ることが可能である。今後はこれらの比較検討を行い、「浩気説」の成立過程の詳細を明らかにしていきたいと考える。

参考文献

- ・『黄葉夕陽村舎詩(全)』(児島書店、一九八一年)
- ・「浩気説」(広島県立歴史博物館蔵、『黄葉夕陽文庫 目録Ⅲ 日記・草稿篇』1024-169-2)
- ・「浩気説」(広島県立歴史博物館蔵、『黄葉夕陽文庫 目録Ⅲ 日記・草稿篇』1023-241-16)
- ・「浩気説」(広島県立歴史博物館蔵、『黄葉夕陽文庫 目録Ⅲ 日記・草稿篇』G006-2-032)
- ・「黄葉夕陽村舎文」(広島県立歴史博物館蔵、『黄葉夕陽文庫 目録Ⅲ 日記・草稿篇』008-012)
- ・「黄葉夕陽村舎文」(広島県立歴史博物館蔵、『黄葉夕陽文庫 目録Ⅲ 日記・草稿篇』G008-014)
- ・「茶山経説につき背景知評論」(広島県立歴史博物館蔵、『黄葉夕陽文庫 目録Ⅲ 日記・草稿篇』G006-1-033)

- ・「菅茶山経説草稿」(広島県立歴史博物館蔵、『黄葉夕陽文庫 目録Ⅲ 日記・草稿篇』G006-1-077)
- ・「郷塾取立に関する書簡」(『広島県史 近世資料編Ⅵ』、広島県、一九七六年)
- ・『黄葉夕陽文庫 目録 日記・草稿篇』(広島県立歴史博物館、二〇一一年)
- ・「冬の日陰」(『日本儒林叢書』解説部第二、巻六所収、東洋図書刊行会、一九二七―一九三八) 札十七則、楽二十七則、総説四十則から成る。天明八年(一七八八)の著(自序)。当時の帝国図書館蔵、中古叢書本による。
- ・「冬の日かげ」(『広島県史 近世資料編Ⅵ』広島県、一九七六年) 札十四則、楽十八則、総説二十則から成る。東北大学付属図書館蔵による。
- ・『日本随筆大成』新装版、第一期、第一巻(吉川弘文館、一九九三年)
- ・『四書章句集注』(中華書局、一九九六年)
- ・『朱子語類』(中華書局、一九八六年)

(一) 茶山の随筆である『筆のすさび』巻二には、「予欲無言。」(『論語』陽貨)「罪我者、其惟春秋乎。」(『孟子』滕文公下)のほか、朱子学の教義に関する文章が見える。

(二) 「誠意説」は、『大学』第六章「所謂誠其意者、毋自欺也」について説くもの。「性説」は、『孟子』の性善説、『荀子』の性悪説を中心に「性」について説くもの。「黙而識之説」は、『論語』述而篇の黙而識之説について説くもの。「克己説」は、『論語』顔淵篇の克己復礼説について説くもの。

(三) 例えば、「郷塾取立に関する書簡」では、社倉を念頭に、飢饉時の穀物配給が可能な個人的活動を二十年間ほど行ってきたとある。

(四) ここでの「言を知る」とは、人の言葉の真意を見抜くことで、具体的には次の四つを言う。① 諛辞(偏って公正でない議論)：その人の心が物に覆われていることを見抜く。② 淫辞(でまかせの議論)：その人の心が何かに惑わされていることを見抜く。③ 邪辞(よこしまな屈折した議論)：その人の心が道理から離れていることを見抜く。④ 遁辞(言い逃れをしようとする議論)：その人の心が行き詰まり困っていることを見抜く。

(五) 菅野彊齋(一七六六―一八三〇)。名は景知、通称は岱立、字は子行、号は彊齋・維新庵・鶏肋山人。播磨出身。西山拙齋に師事。姫路藩での郷校教授を経て龍野藩儒となる。

(六) この経緯の詳細については、現在解説中のVをもとに今後明らかにしていきたい。

(七) 『筆のすさび』には、「肝積もちの事」として本篇と類似した内容が見られる。

今の世に肝積もちといふ者幼少より親の愛を恃みて驕奢放肆にそだち、富るとて人にかしづかれ、位ありとて人に諛れて何事も吾意のごとくなるより、一度意に忤ふ事あれば、俄にはらたち顔色四体に見れ、或は物へゆかんとおもひしに、さはりありてゆく事を得ざれば、庭の内をあるきまはりて坐し得ざるあり、或はありあふ器物を庭に投げ、柱に打つけて砕くもあり、或は妄りに人を罵りて妻子婢僕を打擲するもあり、甚しきは刀をぬき鎗をひらめかすもあり、或は一日に幾度となく手をあらひて人の物をば皆けがらはしくおもふもあり、大抵他人よりは、かほどの事は堪忍もなるべきにと思はるゝ事を、己が気より心をおしたてゝ、自やめとゞまる事のならぬは、皆幼少よりの驕奢放肆にて、一種の気質をやしなひたてゝ、所謂肝積もちとはなりたるなり。予浩然章を講ずるに、此説をいふて直を以て養の反対とす。(『日本随筆大

成』新装版、第一期、第一卷、吉川弘文館、一九九三年)

(八)「我知言、我善養吾浩然之氣。」(『孟子』公孫丑上)また、『論語』堯曰篇に「不知言無以知人也」とある。

(九)毛伝には「狼跋美周公也」とある。

(十)「狼跋其胡、載憲其尾。公孫碩膚、赤舄几几。狼憲其尾、載跋其胡。公孫碩膚、德音不瑕。(狼其の胡を跋み、載ち其の尾に憲く。公孫は碩膚たり、赤き舄は几几たり。狼其の尾に憲き、載ち其の胡を跋む。公孫は碩膚たり、德音瑕まず。)」(『公孫』は周公を指す。)

(十一)朱熹『詩集伝』には、「周公雖遭疑謗、然所以処之不失其常、故詩人美之。言狼跋其胡、則憲其尾矣。公遭其流言之變、而其安肆自得乃如此。蓋其道隆德盛、而安土樂天有不足言者、所以遭大變而不失其常也」とあり、「流言の難に遭うという苦境」と、「ゆつたりとした盛徳を失わない周公の姿」とが対比される。

(十二)「浩然の氣」は、自己内に集積された義が「氣」となって外界へと波及するという一種の身体論的性格を帯びている。こうした身体感覚を伴う「浩然の氣」について、茶山は「癩癩」という病質やその症状といった、極めて身近な生活感覚の観点から論じている。特にこの「浩氣説」においては、癩癩という病質が当人の気質だけではなく、家庭教育や生育環境にも大きく起因すると述べており、茶山の日常生活や世情に対するまなざしが反映されていると思われる。こうした、日常生活や世情に対するまなざしは「冬のこかけ」にも見られる。同書では、「民情、風俗のあしき」ことや「人情のさかしき」こと、民衆の困窮を憂う茶山の姿が見て取れるが、憂世の念の吐露のみではなく、分析や提言をする態度も確認できる。例えば、上の諸問題が米価の変動や民に恒産のないことに起因するとし、節儉や常平倉の必要性を説く点は、茶山が当時の民衆の生活感覚を踏まえながら社会を注視していたことをよく示すものであろう。

On Kan Chazan's *HaoQiShuo* 浩氣說

Yoko SHIMIZU

Kan Chazan 菅茶山 (1748-1827) was known as a Chinese poet in Fukuyama Kannabe, in the Edo period, but he as a Confucian, wrote some theories about Confucian scriptures in *HuangYeXiYangCunSheWen* (『黄葉夕陽村舍文』), and these theories will show different appearance from the Chinese poet Kan Chazan 菅茶山. In *HuangYeXiYangCunSheWen* (『黄葉夕陽村舍文』), we can see some theories that Chazan described the interpretation of the Confucian scholarship. In order to clarify the thoughts of Confucian Chazan, in this paper, I would like to take up his *HaoQiShuo* 浩氣說, and give an overview through its translation.

【Keyword: Kan Chazan, Confucian scholarship, haoranzhiqi 浩然之氣】